

# 土佐のわらべ

第410号《第432回（2015. 12. 10） 子どもの本の読書会記録》参加者5人・文書参加5人

## 『うちへ帰れなくなったパパ』 ラグンヒルド・ニルスツン／作 徳間書店

私は、今まで読んだ児童文学で、父親の影が薄いとよく思っていました。

『うちへ帰れなくなったパパ』は、題名にパパとついていたので、どんな内容かなと思って、手に取りました。最初に驚いたのは、子供がするパパの話ではなくて、パパによるパパの話だったことです。面白く読みました。とてもスピード感があって読みやすい本です。ですが、面白いだけの本でもないのです。ぜひ、読書会で、皆で話してみたいと思いました。

読書会では、楽しくイロイロ話し合えました。大人の本では、そうでもないんですが、子供の本では、父親の影が薄いと感じていたのは、私だけではなかったようです。それについては、母親像は、割と時代や国に左右されない普遍的なイメージがあるのに比べて、父親像は難しく、同じ日本という国でも、時代が少し移ると、いいお父さんというイメージが、180度位変わっているんじゃないかと思われるので、いいお父さんをするのは、中々大変そうです。

この本のパパも、家族のために一生懸命働いていたのだろうとは思いますが、家の中のことは、まったく把握出来ていません。一家で引っ越さなくてはいけないのに、まったく引っ越し作業の手伝いもしないで、当日も会社に出てしまいます。そして、その日、いざ家に帰ろうとすると、自分が新しい住所を覚えていないことに気がつきます。ママに電話しても、余計にママを怒らせて、電話を切られてしまいます。自分の家がどこに在るのか、どんな所かも、分かりません。

そして、バスで偶然、こんな子供の言葉を聞きます。

「パパたちって、なんの役にたつの」

この日のパパには、キツイ言葉です。ですが、パパは考え始めました。

考え始めたパパは、どんな答えを出すでしょう。そして、無事に家に帰りつけるのか、家族に迎え入れられなければ、パパはもうパパじゃありません。

ぜひ、読んでみてください。

クリスマスの朝、仕事人間のお父さんの枕元にリボンをかけて、そっと置いておくといいかもしれません。

(M. O)